



夢中落花

小山美沙子

桜好きの私には、かねてより見てみたい夢がある。散り行く桜の夢である。それは例えば、薄紅色の花弁が、水なき空を、流れ流れて行く、あるいは、風に誘われ、月影に妖しく舞い踊る、またあるいは、廃屋の傍らで、静かに時を刻むかのように、ひとひら、またひとひらと舞い落ちる……そんな光景に夢の中で出会ってみたいのだ。

桜狂いの西行は、「春風の花を散らすと見る夢」に、目覚めてもなお胸騒ぎを覚えたと詠った。一方、春、山寺に詣でた折、麓にて宿りした紀貫之は、「夢のうちにも花ぞ散りける」という句で歌を結んだ。二人が見た夢は、散り初める満開の桜か、それとも、盛りを過ぎた花が、荒む風に乱舞する様なのかはわからない。そもそも、これらは実体験によるものではなく、桜への強い愛着から来る観念の産物ではあるまいか。とりわけ、貫之の歌は、花に染む心情に加え、耽美性への趣向によるものかもしれない。それと言うのも、私自身は、毎年のように近隣の桜並木を散策しながら、切なくも、どこか現実世界から遊離するような不思議な感覚を覚えてつづ、はらはらと舞い落ちる花弁を浴びるのだが、こうした夢中落花の経験がないのである。花見好きの人達からも、そうした夢の話聞いたことがない。しかし、貫之の歌に出会ったせいであろうか、桜の季節になると、無性に夢の中で花の散る幻想的な光景に身を置いてみたくなるのである。

加藤恵の『花音―滝桜―』や大河原典子の『桜月夜』そして自ら「桜ぐるひ」と言う平松礼二の『富士と桜園』など、散り初める満開の桜絵図は、季節を問わずいつでも手持ちの画集で眺めていられる。飽かず眺めていたら、いつか、後から後から舞い降りて来る桜色の雪片に包まれない、遊離魂感の内に、永遠の時を生きている夢を見ることができたらだろうか。

「短きうたたねの夢」でもよいから……。

ネルヴァルは「夢は第二の人生である」と言った。時に現実をも凌駕する夢とつつの間に心地良い連続性が存在するのであれば、在りて無き夢の時間を体験するのも悪くない。

(こやま みさこ)

夢のまた夢

木村友保

普通「夢のまた夢」というと実現するのが大変難しい場合に使う。英語を勉強し、それを教える者にとって「イギリスに留学すること」は第一の夢であった。だが、当時愛知県でも「西三河」という地域の高校に勤めているものにとつて大変幸いだったのが「岡崎金曜会」という英語教師の自己研修グループの存在であった。このグループの先輩がすでに英国大使館文化部（ブリティッシュカウンシル―以下ブリカンと略す）の奨学生となつて、二人もこの夢を実現していたからである。そのための試験の know-how をしっかりと学んで難なく合格し、第一回目の留学が実現した。

二回目の留学はそううまくはいかなかった。ほぼ「私的留学」に近い形の留学にブリカンのような「公的機関」から助成金をもらつて留学することとはほぼ不可能に思われた。実際、ブリカンの京都事務所の担当官には言下に拒絶された。だが、妻のひと声から勇気をもらった。ブリカン主催のセミナーに参加するように勧め、そのセミナー中に「留学のことで相談に乗ってもらえば」という提案だった。でもなかなかチャンスは見つからない。何度も妻に「絶望的だ」という電話をかけた。だが妻は怯まない。そんな中で東京事務所から来ていた女性の担当官に勇気を奮って相談してみた。意外にも「それはもつともな理由だ」と言つてすぐにセミナーの講師で臨時の「面接委員会」なるものを構成し、三十分ほどの英語の面接試験を受けた。合格し、数日後に東京事務所副館長と面接があり、助成金が決まり、その後、県の教育委員会からも「留学許可」がもたらえた。こうして二回目の留学も実現し、今度は妻も子供たちも一緒に「留学体験」となった。だが、夢はまだ終わっていない。

我が家が難病に襲つた。二回目の留学実現に向けて忍耐強くリードしてくれた妻が難病に罹つてしまったのである。どうして妻が？ と何度も問うが、まだその答えがない。妻の回復が「夢のまた夢」で終わるかどうかわからない。

(きむら ともやす)

夢にも思わなかった大学生活

林 慶雲

先日、卒業した大学のクラス会から案内が届いた。大学入学四十周年を記念しクラス会を開催するから是非ご参加を、とのことであった。もう四十年も経ったのか、時間が経つのが速いと痛感すると同時に、様々な感情や思いが心に浮かんできた。

高校を卒業したら受験して大学に入学する。一見、当たり前のようなことは、四十年前までの中国では当り前ではなかった。「文化大革命」のことをご存知の方が多いかと思う。それは一九六六年に始まり、一九七六年に終わった出来事だった。四千年もある中国の歴史のなか、ただの十年間というかも知れない。しかし、私にとっては、小学校一年生から高校一年生にかけての十年間、心身の成長過程においてとても大事な十年間でもあった。この間、中国では大学が閉鎖されており、高校が学校生活の終着点となった。都会の高校生は卒業後に農村に「下放」され、私のような農村出身者は、帰郷し「人民公社」の社員として生きていくのが唯一の進路であった。進路に悩んだり、受験勉強のプレッシャーを感じたりすることもなく、「将来の夢は」というと、多分、「豊年満作」が続くことであった。このような状況が変わったのは、一九七七年、高二の時であった。当時の指導者鄧小平氏が大学を再開し入学試験を実施すると、決断したのであった。

晴天の霹靂という表現はここでは適切でないかも知れないが、正直、漠然とした。なんで今さら、とも嘆いた。それまで、受験はないと思った。真剣に勉強でこなかった。しかも十二年間も入試が止まっていたので受験生の数は半端ではなかった。田舎の高校では勉強ができたほうだと思っただが、都会の受験生には到底かなわないと知っていた。大学生活は夢にも思わなかった。思ったとしても、白昼夢だと確信した。

だが不思議なことに、私は大学の門を叩くことになった。その後、カナダに行き、日本にも行き、また大学の門を叩いた。そして幾つかの偶然を積み重ね、今日、名古屋外国語大学の教壇に立たせてもらっている。これもまた、夢にも思わなかった。夢にも思わなかったことが、現実になっていることがある。私は今でも、そう信じて諦めずに前向きに生きていくことにきめている。

(りん けいうん)

夢のような出来事と現実と

蕎麦谷 茂

私の講義では毎回二百字程度の講義に関するコメントを書いてもらい、優れたものは次の講義の冒頭で紹介するようにしている。

そのコメントは数年前非常勤として教えていた時に提出された。ちょうど母が身罷った最初の、まだ心穏やかならない講義の後だった。講義は形式知と暗黙知について——技術は形式知だが技能は暗黙知であるというものであった。文字や数字、図形で伝達できる形式知と違い、暗黙知は人から人へ時間と場所を共有しなければ伝えることができない。団塊の世代が退職していく現代、企業では彼らの持つ暗黙知をどのように残していくかに苦慮し、例えば形式知化(マニュアル化やコンピュータ化など)を促進している、という内容だった。

コメントはそれを受け、次のように書かれてあった。

「今日は哲学的で少し難しかったです。私の祖母は家におよめに来た時から、たきこみご飯を何かの行事があるごとく作ってきたそうです。作り方を教えてもらって前作ったことがありますが、祖母の味にはなぜかありませんでした。私の母も同じように作るのですが、祖母の味にはおおよびません。これは技能なのだと思います。祖母と何回も一緒に作ることで、暗黙知を形式知化して、おいしいたきこみご飯が作れる日が来るのでしょうか。おばあちゃん、長生きしてね。暗黙知は伝わりにくいからね」

今回の講義の冒頭で紹介して、「おばあさんの暗黙知、しつかりゆつくり受け継いで……」と言っているうちに、不覚にも口元がこわばり、落涙しそうになった。そして、こんな素晴らしい学生のいる名古屋外国語大学で常勤として教えたいと、心から思った。

※コメントは現代国際学部国際ビジネス学科〇九生 後藤那月さんのものです。

(そばたに しげる)



夢を持とう、実現するために努力しよう

横山陽二

本稿における夢の意味を目標、願望ということで話を進めたい。「夢を持つ」として実現するための計画を作り、それを着実に実行していくことの大切さを常々学生に語っている。今年で五十歳になるが、これまで多くの夢を抱えながら実現できたりできなかったりしてきた。まず実現できた夢は、中学受験、大学受験、就職試験である。全て第一希望の夢を実現できた。こうした「小さな」夢を持てば、それを実現するために強い意志、計画、実行力を身につけることができる。加えて、夢を実現する度に自信にもつながる。五十歳台で大学教員になるという夢も、少し早かったが実現できて今日がある。

次に実現できなかったり、途中で変わってしまった夢だが、小学校の卒業文集には、将来の夢は弁護士か医師とある。今思えば、こんな時期もあったかと微笑ましく思う。高校の卒業アルバムには、教育を改革したいとある。高校時代は、先輩である海部俊樹元首相に憧れて、将来は文部大臣になることを夢見ていた。役職こそ違えど、現在自分が考える教育というものをできているので、半ば夢を実現したといえよう。大学の時には外務大臣を夢見て、政治・経済学の勉強に政策立案や選挙の手伝い、そして英語討論や留学に、人脈づくりを積極的に行ってきた。こうした活動を通して、自分の夢は「日本の魅力を世界に発信すること」だと気がつき、そうしたビジネスを行っていた広告会社に勤務した。夢は時として変わるものである。それでも一生懸命取り組んできた努力は、大いに役立つものである。

今日人生百年時代である。次の五十年も同様に着々と夢を抱き、その実現に向けて動き出している。こうしたサイクルは、常に挑戦を続ける事に繋がり、自分自身を高める事にも繋がる。学生に言う前に、「まず隗より始めよ」で自分のケースを紹介させて頂いた。

(よこやま ようじ)

プーチン大統領の愛犬「ゆめ」と 北方領土問題

地田徹朗

「あの夢、この夢」というお題でエッセイの執筆依頼があった際、とにかく何を書くべきか皆目見当がつかなかった。何しろ、小学四年生の時に通っていた英語スクールで自分の夢について英語を使って絵を描いて話せといわれた時に、通産省の役人になると言って、スーツを着て眼鏡を掛けた役人の絵を描いたような私である。私の夢なんぞまあつまらない。ということで、原稿執筆はしばらく放り出してしまった。

九月の教授会でエッセイ原稿を督促せよと依頼が届いた際、ふつと頭の中をよぎったのが、東日本大震災対応へのロシアによる支援へのお礼として、佐竹敬久・秋田県知事がロシアのヴラジミール・プーチン大統領に贈呈した秋田犬の「ゆめ」のことだった。プーチン大統領は「ゆめ」のことをたいへん可愛がっているらしい。実際に、ネットで「ゆめ」の写真を検索すると、とにかく彼女がプーチン大統領に懐いている様子が伝わってくる。二〇一六年十二月にプーチン大統領が訪日し、安倍晋三首相と山口で首脳会談をした際も、この「ゆめ」のことが話題にのぼったようだ。

他方、この首脳会談時に進展が期待されていた北方領土問題の解決は、「夢のまた夢」という感じでだいぶ遠のいてしまった感がある。私はNPO法人国境地域研究センターの会員であり、根室にも二回ほど行ったことがある。北方領土問題についての論文が掲載された雑誌の編集もした。多くの旧島民や根室の市民は、幾ばくかでも島が日本に戻ってきて、「壁」になってしまっている領土問題が解決して、根室がロシアへのゲートウェイになることを切に願っている。領土問題についての考え方は現地の方々のほうがよほど柔軟だ。国境地域の人々に寄り添いながら領土問題を解決する、それがプーチン大統領の秋田犬の如く「ゆめ」で終わらないよう、経済交流からスタートでも全く構わないから、前に進めていってほしいものである。旧島民の方々にとって残された時間は限られている。

(ちだ てつろう)

Les voyages : un rêve éveillé

Jérôme Paccoud

Lorsque l'on parle de rêves, il me vient immédiatement à l'esprit les voyages fantastiques vers des destinations lointaines, inconnues et souvent exotiques. Grâce à l'aviation moderne, nous pouvons désormais nous déplacer d'un continent à l'autre sans effort, en toute sécurité et dans un certain confort. On prend aujourd'hui l'avion comme on prenait autrefois l'autocar, mais cette facilité de mouvement émousse parfois nos sens jusqu'à perdre le sentiment d'entreprendre un périple et de vivre une véritable aventure. À l'inverse, nos ancêtres et les pionniers du siècle dernier risquaient leur vie à chaque déplacement. Jadis réservé à une poignée d'élus, le rêve de parcourir la surface du globe s'est réalisé et démocratisé. L'homme va toujours plus loin, plus vite et ce, plus facilement. Les recherches et les progrès se concentrent pourtant sur de nouveaux moyens de transport encore plus rapides, à l'instar de l'Hyperloop, sorte de train encapsulé ; un projet un peu fou mais prometteur. À l'aube de ce changement de paradigme, je risquerai l'analogie de notre époque avec celle qui découvrit le dirigeable, bientôt supplanté par l'avion. Qu'en sera-t-il demain ? Cette course à la technologie semble sans limites. Grâce à elle, pourra-t-on un jour partir en vacances sur une autre planète, découvrir des paysages extraordinaires

et rencontrer d'autres peuples ? C'est peut-être ce à quoi tend l'avenir de l'humanité. Là est pourtant tout le paradoxe, alors que nous voyageons plus que jamais, connaissons-nous mieux qu'hier notre voisinage ? Ne risquons-nous pas dans cette course effrénée, produit de notre avidité de conquête des distances et du temps, de rendre les relations humaines encore plus superficielles ? Le rêve de voyage ne doit pas se réduire à partir toujours plus loin ; il doit aussi être propice aux rencontres et à la compréhension mutuelle entre les hommes. Ainsi, le voyage de ses rêves ne se trouve peut-être qu'à quelques tours de pédales... Un tel voyage englobe la dimension humaine et la qualité des rencontres. Sortir de chez soi, c'est déjà voyager.

(バク ジェローム)